

松葉屋通信

「山と森、木と人々の暮らし」を一本の糸でつなげていく



私たちの小さな一歩ですが、その行動がはじまりました。

ひとつは『森へいくツアー』
多様な動植物が生育する戸隠を舞台に歩きながら『生きた木』を見て、感じその上で木を使った、ものづくりを経験する。

もうひとつが
『長野県信濃町の山の木で家具をつくる』
身近な山で育った広葉樹を自分たちで選び、伐採し製材・乾燥のち、家具をつくること。

今は小さな点と点ですが、すこしずつ一本の糸につなげたいと思います。



「森へいくツアー」のこと

松葉屋が製作する家具に使う木材は日本の山で育った、樹齢にして100年以上の広葉樹。私たちは木の空（もく）を見て『サクラ』とか『ナラ』、『ケヤキ』と樹種を判断したり、きれいな空だとかうつくしい色だとかお伝えしてきました。でもそれは『樹』のほんの、ほんの一面ではないでしょうか。

樹の一年をみても、冬芽を出し、初夏に葉を茂らせ、秋には紅葉し、落葉する。樹皮や芽や葉っぱのかたち、あらゆるものがひとつとして、同じものはありません。戸隠の複雑で多様な生態系は、松葉屋が扱う広葉樹のほとんどが自生する特異な場所。森へいくツアーでは戸隠の森を歩き、多種多様な動植物の生きた姿を知り、森と人の暮らしのつながりを、それぞれに感じていただきたいと思います。

滝澤 善五郎



大きな、大きな森の守り神のようなシナノキ。皆で見上げて、言葉少なに。木の声に耳を傾けるように眺めました ↓



春日さん

ガイドのお二人

戸隠倶楽部 poleiro (ポレイロ) の荒井さん、春日さん。「あれはなんですか?」「これはなんという花ですか?」皆さんからの質問に丁寧に答えてくださって何気なく歩いていただけでは気づかないことが二人のお話の後は気づくようになりました。

6月13、14日。松葉屋はじめての「森へいくツアー」 みな元気に、行ってきました

1日目 戸隠の森を散策、夜はムササビツアー
2日目 朝に鏡池を散策、木でもものづくり体験

馴染み深い木に出会っては、触ったり、匂いをかいてみたり。



森林植物園の中を散策します。

樹齢200年の一枚板を前に、松葉屋に集まった皆さんで自己紹介。店主から開催の主旨などをお話しさせていただきました。



戸隠の森

14:30



13:30

13:00

START!
1日目



池のほとりの木の枝に、グレープフルーツくらいの大きさの泡がくっついています。これはモリアオガエルの卵。産卵シーズンということで、池のほとりあちこちに見られました。

卵があるということは、近くにカエルがいるかもしれない・・・と探してみると、木の上で眠るカエルを見つけました。



荒井さん



自分が使いたいものをつくる木工の時間。
 まずはつくりたいものの絵を描いたり、
 つくりたいものに合った大きさの木を選びます。
 木の種類は、クルミ・カツラ・栗・桜・枹・楓。
 どれもきのう植物園で会った樹です。



戸隠山を目の前に、
 小鳥のさえずり、
 森におい、
 風にそよっと
 吹かれながら。



制作が始ってしばらくするとカンカン、カンカン、とあちらこちらから木を削り、
 彫る音が響きます。集中して、黙々と木と向き合う、まるで工房のようです。



まるで職人さんのような手
 つき。制作が進み、道具
 も自分の思うように慣れて
 くと木の目を見ながら
 リズムよく制作が進みます。



杉の木を住処にするムササビを見るため、
 巣から出て来る時間をねらって出発。
 しゃべらず、耳をすますと、木が揺れ葉っぱ
 がこすれる音。ギギギギギギ・・・と、
 不思議なムササビの鳴き声が聞こえて
 きます。音のする方向をライトで照らして
 目を凝らすと、「あっ！」いました。
 見つけました!



ギギギギギ

写真提供：
 戸隠倶楽部 poleiro
 (株式会社ラポーザ)

ムササビナイトツアー



梅雨の晴れ間で風も穏やか。鏡池という名前のとおり、
 鏡のように水面に戸隠山が映り込む絶景。好条件がそろって、
 2日目も気持ちのいいスタートができました。



鏡池のまわりには、
 小さな葉っぱがあちこちに。
 森のはじまりの姿です。



今回のお宿は戸隠・宝光社の
 「越志旅館(おしりょかん)」
 全員で食べる食事は、
 まるで合宿のようでした。



板屋楓の葉っぱ型のお皿をつくったのはガイドの荒井さん。さすが、そっくりです。

もうすぐ制作時間も終わり、削ったひとつひとつの跡が刻まれた、2つとないお皿ができました。

2日間一緒に過ごす、皆さん仲良しに。自然と声をかけ合ったり、手伝ったり。

こけしとスプーンと鉛筆立て。家族で手伝い合ったり応援し合っていました。

バターナイフとスプーン、虫食いの跡のある葉っぱのお皿。うれしそうな笑顔のお二人。

アンケート

Q 参加しようと思ったきっかけは？

- ・母に誘われたこともあります。家具屋さんの企画したツアーに興味がありました。(東京都・O様)
- ・森の中で木洩れ陽を浴びて、日々の疲れを癒してもらおうと思いました。(長野県・Y様)

Q 一番印象に残った事は？

- ・モリアオガエルの寝姿とムササビの飛ぶ姿。(長野県・N様)
- ・森に人の手が入り込んでいないこと、木を削るのは大変な事、木を活かす事も大変な事。(東京都・M様)
- ・一番が決められません。(新潟県・H様)

Q 気になった事、希望や要望など

- ・季節ごとの違いがあると思います、秋に同様の企画があればと思います。(千葉県・N様)
- ・1日目が、もう少し早い時間からの開催でも良いのではないかと思います。(長野県・N様)

Q 次に体験するならどんなことがしてみたいですか？

- ・森の散策をもっと長くやってみたいです。(新潟県・K様)
- ・森林伐採の現場を見てみたい。(長野県・N様)
- ・また木を彫りたいです。(東京都・O様)

皆さんの作品がそろって、発表会



取れてしまった傘の柄を自分でつくる。素敵な発想です。

つくった理由、何に使いたいのか、がんばってつくった跡が見える作品はどれもとても素敵でした。

大きなおにぎりと根曲がり竹の子汁！
竹の子汁！

お昼ご飯

おしまい

ふりかえりの時間



15:00

14:30

14:10

12:00

みんなと森を歩き、ものづくりして気づいたこと

今まで材料の一部でしかなかった木の、ありのままの姿に向き合うことで、「木はずっと、森で生きていたい」ことに気がつきました。人間の都合でいただいた木の命は、ものとしての命を全うさせる責任があることを、改めて実感することができました。そのために、やらなくてはならないことが山ほどあって、そう簡単に答えはでそうにありません。

今回のツアーのご褒美は、真剣にものづくりされる皆さんの姿がとってもカッコよくて、見入ってしまったこと。

暮らしに必要なものをつくることは、人間にとって太古の昔からずっとある本能で、楽しさを超えた何か呼び起こされた姿に、心動かされたのかもしれない。

初めての方も含めて、今回こうして出会い、時間を共に過ごし、同じ体験をした私たち。たくさんのお話を話したわけではないのに、森を歩き、一緒にごはんを食べ、無心でものづくりをしたことで、「仲間」になっていたことを、帰路につく皆さんに手をふりながら、そんなことを感じていました。また会う日まで、皆さん、お元気で！！

滝澤 佳子



長野県信濃町の山の木で家具をつくる

あるとき、素朴な疑問が頭に浮かびました。

日本で流通している家具の多くが海外での生産です。また、国内で生産されている家具もほとんどが外国材というのが実情。

一方、長野県は8割が森林、家具材に適している広葉樹はその中の40%。身近にある広葉樹は、林業という枠の中で流通しづらく、近くの山の木よりも外国材が使われている現実。

理由は、安いから、安定供給できるから。だから、気候風土が全く違う地域から日本に運ばれて来る。

なぜなのでしょう？

なぜ何千kmも離れて運ばれた木材の方が安いのか？ 外国から日本にやってきた材の検疫時の薬品消毒は安全なのだろうか？ 近くの山の木はどこで使われているのだろうか？ 外国材は日本の住宅環境に合うのだろうか？ また柾目（もくめ）もなじみのある日本の材のほうが美しいのではないか。身近な広葉樹材を流通させる方法はないのだろうか。などなど、疑問が次々と浮かんできました。ひとつひとつ、時間をかけて疑問をなくしていききたいと思います。

その第一歩として、松葉屋のできることをしよう。

身近な山で育ち、伐採された広葉樹で家具をつくること。

そして、永く永く使ってもらえるように、伝えること。

身近な山の原木を選定して、製材して、乾燥して、家具を制作するには2年以上の時間がかかります。まずは私たちが出会った人と人のつながりからできることをはじめました。

【原木の選定】

森林組合の赤松さんから、今年の3月に連絡を受け、まだ雪深い信濃町の山へ木を見に行ってきました。直径60センチの栓の木を選定しました。切られてから約1ヶ月、ついこの間まで雪の中生きていた木です。



【製材】 栓の木を信濃町の製材屋さんへ持ち込み、製材しました。



切ったばかりの木を触るとまだたっぷり水を含んでいてしっとり。触った手に水分が移るほどです。



1本の木から13枚の板が取れました。天板になる部分、脚になる部分、棚も作る事ができるかもしれません。

木の小口につけられた星印は、木の芯の部分。芯に引っ張られるように木は割れてしまうので、材料としてムダなく取るためには芯を避けて、木取りをしなければいけません。

機械に固定し、反りを考えた厚さに木を引っていきます。機械の真ん中部分に見られる刃に向かって固定した木をスライドさせていくと、大きな音を立てながら丸太だった木が板になっていきます。

こうして製材した板は、これから乾燥に入ります。



700万人以上が訪れた今春、2015年の善光寺御開帳。松葉屋にもたくさんの方々が、訪ねてくれました。御開帳中、松葉屋では「こどもとおとなの道具展」「大地と空、火と草色のじゅうたん展」「亜麻色のうるしの器展」が行われ、蔵にはギャッベのある居心地のいい暮らしのしつらえがなされ、器やリネンの布こもを手に取りながら、大きなギャッベでくつろぎながら、ゆったりとした時間を過ごしていただきました。裁縫箱テーブルなど、松葉屋オリジナルの小家具も含め、定番の道具としてこれから常設展示していきますので、皆さまぜひ、おでかけください。



善光寺御開帳。
賑わう門前通りを



一步はいつて、

松葉屋らしい空間でゆっくり過ごさず。



アイリッシュリネンのこどもエプロンとこどもショルダーに刺した、アイス刺繍。「いつも守られていてほしい」親の願いを込めて。



会期中のワークショップで作られた、ミニミニギャッベと十分の一サイズのシェーカーチェア。子供も大人も真剣で、出来上がった時の笑顔が素敵でした。



使うほどに艶のでる、普段使えてきる白漆の器が欲しくて、つくりました。亜麻色、辛子色、象牙色。重ねた時のカタリという心地よい音色、軽さ、あたたかさが魅力です。



松葉屋通信 VOL.32



発行所：
松葉屋家具店+くらし道具学研究所
〒380-0841 長野市大門町 45
TEL : 026-232-2346
FAX : 026-237-4558
Email : since1833@matubaya-kagu.com
定休日：水曜
発行日 2015年7月7日

松葉屋から香りの贈りもの

今回たなこころさんにオーダーしたのは、「夏のはじまりブレンド」(パチュリー、ライム、ハッカ、カモマイルジャーマン)



パチュリー

今回のブレンドの中心はパチュリーです。シソ科の葉で葉効面では皮膚細胞の新陳代謝促進や抗炎症作用などが強いことから太陽のハーブと位置づけられています。インドでは古くから衣服の防虫に利用され、欧州に送るカシミアのショールの間にもこの葉をはさみ「本物」の証となったり、「藿香(カッコウ)」という生薬として夏に多い胃腸の風邪などに対する漢方薬に配合されています。

このパチュリーに日本産のハッカとライムですっきりとした清涼感と優しい甘味を加え、夏の暑さや忙しさからのストレスなどに優しく働きかけてくれるカモマイルジャーマンも、香りの持続性を意識して加えました。

これから本格的な夏、みなさまが元気に夏を過ごせますように。

たなこころ 松浦まき 080-1437-6065

香りが染み込んでいる紙の葉っぱを少し濡らすとまた香りが立ってきますよ。

